

嘘つきは透明のはじまり

草間 小鳥子

夫の輪郭がかすんできた。唐揚げを噛みながら、ミヤは目を細める。昨日よりもさらに、うっすらとかすんでいる。全体的に、薄ぼんやりしている。テレビを見ている夫は自分の変化に気づいていないのだろうか。ミヤは、箸の止まった陽人の手首へ目を落とした。

あれ、と思ったのは、先週の土曜日。出張から帰った陽人がシャツを脱ぐのを見て、なんか白くない？と感じた。夏はまだ少し先だけれど、お天気続きで、すっかり日焼け止めを忘れて出かけてしまった日など、腕が赤くなる。陽人は、港町へ出張だったはずだ。出ずっぱりだと言っていたし、普段から日焼け止めを塗っているところなど見たことがない。不思議だ。洗濯機を回しながら、首を傾げた。最近、こっそり化粧水を使い始めたのは知っているけど。なぜか「そんなもの俺には必要ない」と頑なに否定するけど。

陽人は些細な嘘をつく。結婚したての頃、ミヤの十二指腸炎の手術に付き添うため、陽人は架空の遠縁の叔母を癌で殺した。

「葬式に出るからって上司に言って休みをもらえたよ」

胸を張る陽人にミヤが、

「家族の手術の付き添いでずっと普通に言えばいいのに」

と言うと、なぜか機嫌が悪くなり、ぶつくさ言っていた。

このあいだだって、スーパーから帰るのがやけに遅いので、

「どこで寄り道してたの」

とミヤが尋ねると、陽人はむっとして、隣の婆さんが足を挫いたのを見て歩きやすい道を遠回りしてカートを押してやったのだと憤慨した。だから後日、庭でバラの手入れをしていたお隣さんに、

「足は大丈夫ですか」

とミヤが声を掛けると怪訝な顔をされた。まあ、嘘。たぶん、嘘。どうせ、カフェかどこかで油を売っていたんだろう。息抜きしたいと言ってくれば、行っておいでと言うのに。なぜすぐばれる嘘をつくのか、ミヤにはわからなかった。でも、小さな嘘なので、咎めずにいた。すぐにばれるし。嘘をつくと舌を切られると言うが、これじゃ陽人には舌が何枚あっても足りない。あ、切られるではなく、抜かれるか。お隣のお婆さんがバラの枝を切り落とすのをベランダから眺めながら、ミヤは洗いたてのシャツをばっと広げた。

夏を前に、陽人の肌はいよいよ透明感を増した。本人もさすがに気になってきたようで、半袖のシャツに手をかけてから、ちょっと迷って長袖へ腕を通す。

「帰り、病院へ寄ったら？」

玄関で靴を履く陽人にミヤが言っても、

「会議で遅くなるから」

と出かけてしまった。駅前にできた皮膚科、評判いいみたい。週末、陽人を引っ張って行こうとミヤ

が郵便受けを覗いていると、

「皮膚科じゃだめよ」

声とともに、ちよきん、小気味いい音が降ってきた。ミヤが顔を上げる。脚立にのったお隣さんと目が合う。

「手遅れになるよ、あんたの旦那」

お隣のお婆さんが、皺だらけの口をすぼめる。缺の歯がきらりと光り、ミヤは瞬きをした。

「あの嘘つき旦那さ」

たしかに陽人はつまらない嘘をつくが、他人に家族を悪く言われるのは嫌な感じだ。しかし、ミヤが口を尖らせる前に、早口でお婆さんは言った。

「半蔵門駅前の戸田内科。名医がいるよ。今すぐにでも行かないと。透明になっちゃう前にね」

透明、という言葉に、ミヤは息をのんだ。透明に、なる？

その時、縁側の障子の向こうから「おい」と呼ぶ声が出て、お婆さんはミヤに目配せすると、ぱたぱたと引込んでしまった。障子の向こうで、お婆さんの影だけが動く。

呆然と郵便物を抱えて家へ戻り、呆然とパソコンの電源を入れ、呆然と仕事に取りかかったミヤが、そういえばお隣さんって、お婆さんの一人暮らしじゃなかったっけ、と思い出したのは、お昼のレトルトカレーを口に運んだ時だった。

「なぜもっと早く来なかつたんですか」

陽人を一目見るや、先生は頭を抱えた。戸田内科の戸田先生が抱えた頭は、白髪混じりではあるがふさふさと茂っている。ミヤは、陽人の横顔を盗み見た。陽人がこっそり育毛サプリを飲んでいることは知っている。なぜか、抗アレルギー薬だと嘘をついているけれど。しかし今となっては、髪の毛どころの騒ぎではない。夏も終わりに近づき、向こう側の景色がうっすら透けて見えるほどとなり、同僚からは心配され、上司からは営業に支障が出ると注意され、受診を渋っていた陽人も、ようやく重い腰を上げたのだった(休みをとるのに、架空の遠縁の叔父を殺した)。このままでは、髪の毛はおろか、丸ごと消えてなくなってしまうんじゃないだろうか。ミヤは姿勢を正す。

先生は、あなたの透過の原因はですね、と陽人を見つめこう言った。

「嘘です」

「は」

「嘘をつくことです」

ミヤも陽人も、黙ってしまふ。嘘をつくことと透明になるなんて、嘘みたいな話だ。先生は、ホワイトボードで説明を始めた。

「例えばですよ。Aさんという人が、『仕事だ』と嘘をついて、釣りへ行きました。するとですね、Aさんの実像はわずかながら、嘘の中の職場へ移動する。つまり、存在し得たかもしれない架空の次元へほんのちよと自分を置いてきてしまうわけです。バウムクーヘンを一層ずつ剥がすことをイメージしてください。Aさんは自分がついた嘘の世界へ、残像のように剥がされていくわけです。それが続くと、わかりますね。実像が段々と失われてゆく。『薄っぺらな人間』っていうでしょう。まさにそれです」

じゃあ、嘘の叔母の葬式に、買い物帰りの遠回りの道に、抗アレルギー薬を処方してもらったという薬局に、いやもつと、もしかすると架空の出張先へ、取引先へ、陽人は実像を置いてきてしまったというのか。ミヤは陽人を見た。陽人は拳を握り、うつむいていた。

「俺は、嘘なんてついてない」

「はい、それです」

先生は、マーカーでふさふさの頭を搔く。

「嘘なんかついていない、みなさんそうおっしゃいます。そもそも、嘘をつくとき透明になるなんて、おかしい話でしょう。嘘を信じる力が強い方ほどね、透けやすいんです」

眉をひそめる陽人の方へ、先生は身を乗り出した。

「嘘をつく。すると、あなたはいつの間にか、自分でもその嘘が本当のように感じてしまう。当然、罪悪感もあります。で、奥様にこう言われたとします。『本当に仕事だったの？』と。もう自分の嘘を信じてしまっていますからね、嘘を指摘された旦那さん、怒るでしょう？俺が嘘つきだというのか、みたいに」

陽人がミヤの方へ体を向ける。なんとも言えない、情けない顔だった。それから、がっくり肩を落とした。

「夫は元に戻りますか」

「元に戻す薬はまだ治験中でしてね。透過が進行しないように頑張るしか方法はないです」

「これからは嘘をつかないようにする、と？」

先生は、あーだめだめ、と両手を挙げた。

「透明になるような方はもうね、息をするように嘘をつくわけですよ。それは無理です」

陽人が背筋を伸ばして言った。

「俺、もう絶対、嘘なんて言いません！」

「『はいはい、嘘ばかり』」

先生はゆっくりと言い、椅子ごとミヤへ向き直った。

「これです。まずは、周りの方々が彼を信用しないこと。嘘は、信じられてなんぼですからね、信じられないとその力を失っていきます。そのためには、ご本人が何と言おうと、『はいはい、嘘ばかり』、これを言い続けてください。全ての方々がですよ。ご家族も、親戚も、ご近所も、仕事仲間も、全ての皆さんが徹底してこれをやってください。お辛いですよが、ご本人のために。いいですね」

「はい……」

弱々しくうつむいた陽人に、「はいはい、嘘ばかり」と先生が声をかけ、それで診察はおしまいだった。

午後四時の車内はガラガラで、窓から差す夕暮れの日差しはもう秋だった。

「なあ、ミヤ」

だんまりだった陽人が、ようやく口を開いた。慎重に言葉を選ぶように、おそろおそろ話す。

「俺、ミヤを騙そうと思ったわけじゃないんだ。やましいこともしてない。ただ、アイドルのライブに行くなんて言ったら笑われるんじゃないかって、つい」

ミヤは西日に染まる空っぽのシートに目を落としたまま、

「……はいはい、嘘ばっかり」

とつぶやいた。陽人は唇を噛む。

「責められる、馬鹿にされる、と思うと怖かったんだ」

「はいはい、嘘ばっかり」

陽人の、見栄っぱりな割に臆病なところは、ミヤもよく知っていた。それでも自分にだけは、気心を許して本音を打ち明けてほしかった。どんなに小さな嘘でも、不利益なんかなくても、嘘をつかれるのは悲しい。これっぽちの嘘で誤魔化されようとしている自分が情けない。あたしはもっと、怒り散らしてよかったんだ。ミヤは、いつの間にか握りしめていた拳を膝の上でほどく。

「俺、まずは自分に嘘をつくの、やめる。格好つけるのも。信じてもらえないだろうけど」

じゅうぶん格好悪いか、と陽人は半透明の手のひらをむすんでひらいた。はいはい、とミヤは言いかけ、でも黙って窓の外の夕映えを睨んだ。

病院を紹介してもらった礼にミヤがお隣へ出向くと、お婆さんはバラを剪定しながら言った。

「どんな生き物にも、回復する力がある。でもね、成長できるかどうかはその人の頑張り次第さ。あんたの旦那はどうかかな？」

お婆さんがぐっと身を乗り出す。ミヤは決めていた。透明人間とぶつかり合ったところで張り合いはない。陽人がすっかり実像を取り戻したら、こちらも向き合い方を決める。話はそれからだ。

「ま、治験は順調みたいだよ」

顎をしゃくる方をミヤが見ると、ビニールの残像のようなお爺さんが、障子の向こうから顔を出す。

「おーい、時計の電池が切れてたぞ」

お爺さんの声には、はいはい、嘘ばっかり、とお婆さんが慣れた口調で返す。

「旦那様、だいぶくつきりされましたね」

「よかったよ、まったく」

軍手をした手でバラの枝をわっしと掴み、お婆さんはミヤの耳元で、だってあんた、と声をひそめた。

「透明じゃ、舌が切れんもの」

ちよきん